日本生物學會誌

第 3 号

日本生物學會

1978年 6月10日
(1979年12月1日 増刷)

第 3 号　　もくじ

半仙半魚：偏見と独断（3）……73
野　良：金沢大学だより―― 4年生の1年……78
横町の隠居：古い博物屋のボヤキ……79
足立興一：生物の歴史性が忘れられたとき――綿ふき病の示すもの……81
奥野良之助：魚陸に上る――魚から人間までの歴史（2）……86
蜻蛉雲："手記" ある生態学徒の堕落（1）……99
奥野良之助：〈書評〉マフモード・マンダニ著自主講座人口論グループ訳
反「人口抑制の論理」……104
編集者への手紙……107
学会および非学会記事……108

偏見と独断 (3)

私でもたまに本を読む事がある。ほとんどが釣りの本である。日本全国で一千万人の釣り人がいる時代だから、釣りの本の種類もこのころではなかなか多くなってきた様だ。そして今ごろでは「釣りをやる人達とは、どのような性格の人間なのか」とか「なぜ釣りなどする人間が増えてきたのか」という言葉が、やたらと目につく様になって来た。幸か不幸か大学時代に「なぜ大学に来たのか、なぜ学問をやるのか」と、「なぜ」と聞かれたら、それを考えなければならないというクセができてしまった。

あれこれいろいろ考えたが、カッコいい理由が見つからない。そんな時、ある釣りの本にかなり有名な作家がカッコいい理由を言っていた。「釣りをする人間には、心に傷を持った人間が多い。」　「これにきめた！」

さっそくそれを使わせてもらった。しかし相手が悪かった。「お前、齢はいくつや」「３３や」「そんなエエ齢をして、心に傷の一つもない人間がおると思ってるのか。おれなんか、心だけでなく胃にも傷があると医者に言われて困っているんや！」　ガックリ！（エライ人の言葉を引用するとロクなことはない）

それにこ　　いろいろ聞かれても「遊びの原点　々々」と、本人でもよくわからない言葉を言ってごまかしている。うるさく聞く奴には、「そのうち、半仙でなく本仙になったら、ちゃんと言うてやる」とカラ約束をしている。

話はもしかしたら横道にそれるがもしれないが、今まで書いた事と多少関係があると思うので、釣り＝遊びの原点、について書いてみたい。

私の釣りの師（厳密に言えば魚釣りまたは魚採り）は、２人いる。子供のころ（１人で釣りに行けるようになった年ごろ）はオヤジで、大学生になってからは親類らしき医者（今は故人）の２人で、釣りの師であり又、遊びの師でもある。

２人の師に共通しているのは、その弟子の存在を意識せず、自分のやりたい風にやり、弟子がそれに文句を言えば「それじゃ、どこかへ消えろ」という風だった。そのためこの両人から、ほめられた記憶がほとんどない。ただしこれ（魚釣り又は魚採り）に関しては、だれに対してもやはり同じ態度であったように思う。要するに遊びというものに関しては、あくまで自分のやりたいようにやり、相手がそれについて来なければ勝手に自分でやれというのが原則の様であった。（その他、妙に相手を意識するようなこともあったが）

子供のころ、魚釣り又は魚採りにいってオヤジにバカ・アホとしかられた事を、少々のうらみをこめて書くことは、心がワクワクする気もするが、せっかく回復した（一時期＝大学時代に剣呑なふんいきになった）親子関係をまた悪くすることもなかろうと思うので、今回はやめておこう。

もう1人（今は故人となった）の医者の方にも、ずいぶんバカ・アホとかわいがられた（本当はいじめられたのだが、故人に敬意をはらって）。この師の方は、戦時中は軍医（シベリヤへ行っていた）であり、又、私が釣り（主に鮎釣り）を習っていた時期には、剣道の師範でもあった。だいたいどういう人物がは想像がつくであろう。習ったのは釣りだけでよかった。剣道も習っていたら、今ごろは心の傷ぐらいでは済まなかったであろう。

今でもその師の所へはじめて行った日のことを、はっきり思い出す事ができる。大学生活にいや気がさし、家出がてらにこの師の家によった。この家につくなりこわい顔の先生（医者はみな先生と呼ばれるらしい）が、「お前は釣りが好きらしいな」と言ったので、その時はそれから以後のおそろしい日々を想像だにできなかったので、「ハイ」と答えてしまった。「それならおれについてきてもいいぞ」「何を釣るのですか」「鮎釣りをやる」と言われ、「マア鮎釣りは一度もやったことがないので、一度つき合ってみるか」という軽い気持で、その日から行く事になった。

医者というものはまだ陽の明るいうちから遊びに行く様子など、患者の前で見せるものではないらしかった。それなのに病院の入口で「釣りの用意ができました」と、病院中にひびくような声で言ったものだから、それ以上の大声で返事が返ってきた。「バカヤロウ、すぐ車に入っていろ！」　入院患者がみな窓を開けて、気の毒そうにこっちをながめている。こちらまでが、まるでどうしようもないバカが診察を受けにきて、病院の入口でどうしていいかわからず、ウロウロしている感じになってしまった。

車から降りて河原に出るやいなや、この先生、本当に生き返った様な顔になっていた。「この河の水はいつ来ても本当に清れいや、まず一杯」とその河の水を手にすくって飲む。「ああうまい！」私もつられて、手にすくって飲もうと先生の方を見ると、上（上流）でズボンの中から白いハンカチのようなものをスルスルと引っぱり出して水洗いをしている。フンドシである。うっかり水も飲めない。

鮎釣りでは、友釣りをするため、まず最初にオトリ鮎をつかまえなければならない。ガラガケ（地方によってはコロガシ、その他いろいろな呼び方がある）という針を数本つけた仕掛で、鮎のいそうな所へ投げこみ、鮎を無理矢理に引っかける方法である。こういうオトリ鮎を採る場所（ガラガケの場所）でも、川底の状態、水の流速等からして、わずかなポイント（魚のいそうな場所）が選ばれる。ところが弟子と先生が選んだポイントがたまたま同じで、こともあろうに弟子が無断で先生より先に、その場へ第一投を投じてしまったのである。しかも鮎をおどろかせ

ない様にオモリを静かに落さなければならないのに「ポチャッ」と豪快に投げこんだものだからたまらない。水面に波紋が立つような迫力でしかられた。

仕方なく、先生に遠慮して少し上流の流れの早い所でオトリ鮎を採ろうと、第一投を投じた。しかし水面に着いた瞬間、ハリ、オモリといっしょに、白い布がヒラヒラと沈んでいくのが見えた。もしや、と思ってあわててサオを上げたら、やはり不安が適中した。ヤナギの枝に干してあった先生の例のものを引っかけてしまったのである。とっさに先生の方を見たが、幸いこちらに背を向けていた。鮎のハリはカエシがないから、あわててはずして「キタネー！」と思いながら一度しぼってヤナギにかけ直した。そして第二投目を投じた。しかしすぐ地球（川底の石）を釣ってしまい、仕方なしに流れの早い川の中央ぐらいまで、ジャバジャバと水をかきわけそれをはずしに行った。とたんにうしろの方から「バカ！」という例の先生の声がした。その場所は先生のいつもの友釣りの場所であり、その真中へ荒しに行った様なものだった。鮎のナワバリと先生のナワバリの両方を荒してしまったのである。今にも先生（剣道の師範）の釣りサオが竹刀（剣道）に早変りするのではないかと、川の真中で立ちすくんだ。

何度かガラガケをやったが、オトリ鮎が採れそうもないので、悪口を言われるのを覚悟で、先生にオトリ鮎を借りに行った。思ったより先生はニコニコして「そうか、そうか、やっぱりこの川には、バカな鮎はいなかった。よしよし」1人でウナズキながら1匹だけくれた。

鮎の友釣りというのは、初心者にはなかなかむつかしいものだった。鮎を遊ばせておくと、すぐ流れのゆるい岩かげで休んでしまい、地球を釣ってしまうのがおちである。そうかといって流れの早い所をへたに引くと、鮎は水面をキリキリ舞をしてすぐ弱ってしまう。下から釣り上って来た先生これを見て、「コラ！おれにしかられたからといって、おれがくれてやった鮎をいじめるのは見当違いだぞ。」

それでも日が暮れるまで2匹釣る事ができた。

日が暮れてきたら今度は毛バリ釣りである。ここの毛バリ釣りは、盛岡式といって、木のウキの上、下に毛バリを5、6本つけ釣る釣り方で、広い川なら3、4匹一度にかかる事がある。まだ明るさがのこっている内は小物が多く、ウグイが主でたまにヤマメがかかってくる。ウグイは大げさに毛バリに飛びついてくる。ヤマメはスーッと毛バリに近ずいてくる。向うあわせでも慣れない時はなかなかむずかしい。かなり暗くなると鮎がくる。毛バリで釣れる鮎はナワバリを持たない鮎といわれているので、型も小さいが、一度に2、3匹かかってくる事もある。鮎は小さくても引きが強く、糸の張りに逆う様に逃げるので、糸をたるませないかぎり逃げられる事は少ない。この川はまだ汚れていないし、釣り人もそれほどいないので、毛バリ釣りでかなりの数が釣れる。おもしろくて、つい時間の過つのも忘れて熱中していたら、又、例の先生の声が聞えてきた。「コラ　いつまでやっている。さっさとサオをしまって帰れ！」私の近くで釣っていたオッチャンまでがびっくりして、いっしょにサオをかたづけにかかる。そして私の後を通った時「あの人（先生）は何ですか」ときいた。「さあ、この川の持ち主ではないですか」わかった様

な、わからない様な顔をして、そのオッチャンは上（上流）へ引越していった。

家につくまで何度、バカ野郎と呼ばれただろうか。（女性だったら何と言って怒っただろうか。バカ女（メ）だろうか。一度聞きたかった）それでも鮎をはじめ、その日かなりの魚が釣れた。だが先生はこの弟子の釣った魚を見て、「アーアー、カワイソウに、見てみろ！魚がみんないやがって、お前に顔をそむけているではないか。死んでも死にきれんだろうな！」

それから（その日から1ヶ月間）、先生に何を言われ様と、毎日々々、釣りをやった。先生も、わずかなヒマができればいっしょに釣りをやった。そのため、年齢的にも先生の方が体力がもたなくなってきた（先生は釣りの後に剣道も教えていた）。先生の家族や看護婦がみんな心配して、この弟子にだんだんとつめたくなってきた（弟子がいなくなれば、先生も少しは釣りをひかえるだろうと思って）。この家にきた時は、あこがれのやさしい白衣の天使の前ではまぶしくて目をふせがちだったのに、いつの間にかこの看護婦達が迫意の天使になり、会っても恐ろしくて目をふせがち、に変っていった。それでも先生の方は「お前が行かなくてもおれは1人で行く。お前がこの家の事をとやかく考えたりはするな」と言ってしかられ、とうとう1ヶ月間1日も欠かさず釣りに行った。この年、先生はずいぶん無理をしたらしかった。それから2年後に、その先生は故人となった。この弟子が来た昨年から、体調がおもわしくなかったらしい。そして医者であったためか、もう治らない（胃ガン）とわかり、都会の病院へ入院する日に、家の者にもう一度河を見たいと無理を言って河へ行ったということだった。

先生が死んだしらせを聞いて、ずいぶんこの先生の家族に取り返しのつかない事をした様な気持になり、とても家族の人といっしょに墓まいりに行く気にはなれなかった。それから何ヶ月か後に、1人で先生の墓に詣でた。2人でよく釣った川で魚を1匹だけ釣り（あまり釣りをする気になれなかった）、それを墓前に供えた。今は故人となった人と話をするのはイイものだ。（不真面目としかられるかもしれないが）ウソをつく必要もないし、何を言ってもしかられない。「その魚はお前みたいなヘタクソな奴でも釣れるようにと、おれが釣らずにのこしておいた奴だ」と先生が言っているような気がした。「お宅（先生）にはずいぶん悪い事をした様に思う。おかけで他人（ヒト）にはこんな話はあまりできないし、家の人（先生の家族）には会わす顔もない。でもやはりおもしろいものは、おもしろいとしか言い様がない。お宅（先生）には魚の釣り方（遊び方）と遊びの態度を教えてもらった様な気がする。そろそろ免許皆伝では！」「ほしかったらおれの所までとりに来い」「そんな（はかない↔墓ない）事はいわんでください。」

2人の釣りの師（オヤジと医者）には、人生（まだ33才だが）の大切な時に遊びを教えてもらったような気がする。（りっぱな人間になるためということとはまったく関係がない。むしろその逆で、りっぱな世間に認められる人間になれなくても、今の社会でおもしろく自分で生きていくという事である）　オヤジから習った子供の頃の魚釣りも、現在の自分にとって生活の糧（カテ）を得るには、あまり役立っていない。それだからこそおもしろかったのだろう。それは、子供の

（自分の）世界の中で生きてきたという事であろう。

子供の頃から親が将来の事を考えて、学校以外の子供の遊びの時間まで管理し（やれ水泳教室、ピアノ教室、英会話、そろばん……）をやらせるのは、それはやはり子供のためを思う親心なのかもしれない。それを基に成人になって社会的に認められ、それがすばらしい人生であると思う人は、それでもよいのかもしれない。

子供に何か将来役立つ事を習わせて、そして、それをうまくこなした場合に、おとなが拍手かっさいで子供を誉めたり、物を与えたりすれば、やはり子供もそんなものかと思いこみ、それを得んがために次の段階を目指してがんばる事が生きがいになるであろう（それが本来の子供の遊びの楽しさにかわり得るものと思いこみ）。そして、そこに親と子供が一体となった現代の教育状態が生まれてくるのだろう。そうしなければ現代は、成長して生活の糧を得にくい社会なのかもしれない。それを強いて悪いときめつけられないのかもしれない。しかし私の場合を今になってふり返ってみると、子供の時期をく成長して生活の糧を得るのに（あるいは他人より、よりよい社会人としての評価を得るのに）必要なことを身につける準備段階の方に重きを置き、又、子供には子供の世界があり、それは大人の世界とほとんど一致することがない、ということを親がしぶしぶでも認めなかったとしたら、何とも味気ない子供の時代を過していたのではないかと思う。私には、親にしかられ、先生にしかられ、警察にしかられ（小鳥をカスミ網でつかまえ、よくつかまりそうになった）、それでも、やりたいからやる、というのが子供の世界の遊びではなかったかと思う。

私も一時期、高校、大学と入試々々に追われて、他人よりよい点数をとり、そして、そうすることで周囲がよろこび、自分にとってもそれがいずれ幸福につながる道であろうと思っていた。自分のやることを周囲がきめてくれるものであり、又それをやれば周囲が拍手を送ってくれる。それを生きがいとしていたようにも思う。しかし、これでも人並に悩み多き青春時代、それが生活の糧を得るためだけのものでなく、自分の生きがいとなっていたむなしさを、あの医者（この医者が社会的にどんな評価を受けていたかは、はっきり知らない）に再発見してもらったように思う。

今頃では大学で、自分で何をやったらいいのかわからず、そのため教官に研究テーマを見つけてもらい、それを教官あるいは周囲の人々が評価をしてくれ、それで安心している。そうでなければどこか自分の心の内に穴があいたような不安におちいっている。

さらにひどいのは、いい大人（学生）が自らで遊ぶ事もできず、教官あるいは学生自治会が幼稚園の遠足なみに十ぱーからけにして遊びに誘われていっている。そうゆうのを見ていると、気味が悪いよりむしろ恐ろしい感じさえする。

私自身、生活の糧を得る（仕事）中で、どれだけ自分自身を見失なわずいられるか、それほど自信はない。ひたすら金の盲者になるか、名声を追い求めるかもしれない。（時々それに気づ

いてハッとする事がある）　でも遊びだけは自己流にやりたいものだと心にきめている。

◎　自分の遊びも仕事（学問研究）も、他人からの評価がなければやる気のしない人々が集まった社会ほど、いやな社会はない。

◎　遊びに主体性を欠く人は、己の仕事（学問研究）にも主体性を欠く（やや独断と偏見）。

◎　遊びをやるなら魚釣りにかぎる（独断と偏見の極まり）。

（半仙半魚）

！？金沢大学だより？！　　4 年 生 の 1 年

初夏、5月、北陸金沢の地にすむものにとって、このように美しく楽しい季節はない。雪とみぞれと曇り空に閉じこめられた冬が去り、明かるい太陽が輝きはじめ、人々は、オーバーを脱ぎ、上着をとり、セーターをはずし、もう少し進めばもっとながめがよくなるのだが、その辺で進行はとまり、身や心を軽くして、山や野原や町中を歩く。

4月に、あこがれの"講座"に配属された4年生は、教授からテーマをいただき、手さぐりで研究をはじめる。そして5月、かれらは身も心も重く、野山に実験室に、研究ととりくむ。人間社会のどこにでもいる怪物"格差"が、明かるい太陽の輝きの下にも、やがて姿を現わす。研究が少しばかり調子よく進んでいるものは、意気揚々とゼミでしゃべる。うまくいかないものは、だれにもきこえぬように小声でボソボソとつぶやく。小学校以来、陽の当る場所のみを歩いてきた優等生の、はじめてのザセツの経験である。

9月、大学院入試がこの差を決定づける。選ばれた優等生は教官のような顔つきに変り、おとされた落第生は、どこの大学にでも一つや二つはある、おちこぼれのタマリ場で、インスタントコーヒーを飲み即席ラーメンを食べ、インスタントな話題に即席の冗談をとばしてなぐさめ合う。

また3月、かれらは卒業していく。優等生は大学院へ、落第生は社会へ。その行く先は、教員、役人、会社員。

どこへいってもただ一つ、かれらはその職場で、おちこぼれている人をふみつけにしたりいじめたりすることはないだろう。その心境をわずかなりとも経験しているからである。

"このくらいのことがなければ、アホらしくて、大学の先生なんかやっておれるか。"

（野良）

日本生物学会誌　第3号　1978

古い博物屋のボヤキ

(横町の隠居)

博物という言葉はずい分古い言葉になった。いまでは、こんな言葉も知らない人が多いだろう。知っている人は古い自然科学への軽べつの代名詞として使っている。もっとも、軽べつされても仕方がないかも知れない。動物、植物、鉱物、何んでも手を付け、浅く広く、しかも内面的なもの、本質的なものはそっちのけで、外形構造、はては分類、命名して能事足れりとしたものだから。しかし好きで入った道であるので、軽べつされようと、ののしられようと、なかなか止められない。この道が高じて来ると、しゅう集魔、採集魔となり、経済的に家計をゆがめ、人の持物を失敬したり、はては自然を破壊するという悪魔と化すわけである。私は幸か、不幸かあまり熱意がなかったので、しゅう集も採集も極めて控え目。おかげでトラブルは起こさない、その代り何の業績も上げないままに年だけはとってしまった次第。ところでまた博物のことであるが、このように軽べつされ、忘れられたはずの言葉が現にゲンゼンと中央に、地方に生きている。それは博物館である。そんな博物を馬鹿にするなら博物館の名も変えたらどうか。どうも片手落ちのように思う。と言ってもう一度博物学などの名がリバイバルしないくらいは判っている。本草学や金石学が生き返らないのと同じである。

ところで博物学の伝統？をいまだに伝えているのが、分類学である。これも博物学同様前世紀的なものである。広く大な標本と、新旧、世界各国の文献をモーラしていないと、うかつな発言が出来ない。そこで象牙の塔が建ち、教祖様が生れる。ジャコがうっかり物を言うと、「ダマレ無礼者、余はミトミツクニなるぞ」となるわけ。田舎の老博物屋は、すみでゴソゴソと、ゴミタメの中の余り物を探しては「はてこれは何だろう」と首をひねっているだけである。

「ミツクニ」級になるとそうではない。ちょっと違ったといっては新種、どこにあるのか判らないような文献、最近の情報をす早くキャッチしては学名変更と花々しい御活躍。大変だろうと思う。しかしその反面、後年また、この整理、後始末も大変だろうと取り越苦労

する次第。

テレビの対談でだれかが湯川大先生に「どうしたら新しい学説が考え付くのですか」と聞いたところ、大先生、さりげなく「取り越し苦労をするこっちゃ」との御託宣であった。そうすれば、さしずめ私など取り越し苦労の点ではノーベル賞は確実である。

あまりひんぱんに学名が変るので中には和名で押し通す人もいたが、この和名のもとになっているのが、徳川時代の本草の本であるので、どだいもとが心もとない。

学名が変るは、和名のもとが心細いでは、ジャコ共はうろうろするばかり。
外国、特にアメリカあたりは「素人」と言われる人も堂々と著書を書いている。どんどん合併したり、無視したり。もっとも外国の人には日本人が和名と学名とのつながりを気にするほど、通俗名と学名とのつながりは気にしていないらしい。日本であのようにモノグラフを出したらどのように袋タタキに会うだろうかと思うと、考えただけでも恐しくなる。

もっとも、文献もなく、コレクションをする資金も、体力も、地位もないものは、夜ごと日ごと出来る新種におびえ、ネコの目のように変る学名に目まいを感じているのがオチである。

お前は何をグズグズ言っているのかと、思われる方にお答えする。標本を公開してほしい。欲を言えば外国にある模式標本を返してほしい。文献、少なくとも原記載を見られるように一堂に納められたい。そうして学名などは「休戦ラッパ」であまり変えないで欲しい。古い退職の博物屋のジャコでも納得出来る同定が出来るようになれば、日本も文化国家と言えるだろう。テレビの台数、自動車の台数の多いばかりが能ではなかろう。暴言多謝。

生物の歴史性が忘れられたとき

―― 綿ふき病の示すもの ――

足立　興

綿ふき病といっても、このごろの若い方はもう御存知ありますまい。しかし、綿ふき病の教訓は、日本の現代の科学のもつ大きな弱点を示したという点で、風化させてしまってはならないもの、何らかの形で、まとめ残されるべきものと考えます。小さな資料はもう失われたでありましょう。わたしはその全体のようすを知るには、ほどよい立場におりましたので、わたしの頭の中に刻みこまれたものをも使い、私憤に近い所まで混えて、ここに書き残します。

ことは、昭和32年、岡山県、林野(はやしの)の田尻病院にはじまります。念のため、かきそえますが、あとで訪うことになる田尻医師は真面目な好感のもてる方でありました。ここの近くの農家の主婦の方が、この病気にかかられたのです。それは、下腹の傷口から膿とともに多量の綿が出てくるものでした。傷は深く、大きく、その中から、取っても、取っても、綿がふき出します。綿ふき病の名のゆえんです。綿は真正の綿であることが、検鏡其他で証明されました。もちろん人為搜入も疑われましたが、何を好んで痛い傷口に綿を入れようか、とされました。

田尻氏は綿の種子の迷入説をとられました。この女性は若い時、ワタの栽培をされたことがあります。その時、たまたま迷入した種子が人体内で増殖し綿花となったのであると。氏は、日本医事新報にこのことを発表され新聞種にもなりました。そして、おどろいたことに、日本中に、この病気が散発したのです。

この奇病にとりくまれたのが、阪大（ここで筆者ヨイヨイとなり、字、さらによみにくくなる）の二国教授です。高分子化学の権威であり、すでに澱粉病などに出あわれておられた氏は、酵素突然変異説ともいうべき立場をとられました。ある医学誌（学会誌で誤い）の主催で、林野に近い湯郷(ユノサト)温泉で、この奇病についての座談会が持たれました。田尻氏、二国氏をはじめ、阪大微研の方や、赤堀四郎氏の名も見えました。赤堀氏が積極的な反対発言をなさらなかったのを今も残念に思います。

身近に起ったのは、福知山病院の若い女性の患者さんでした。腹部の臍(はな)から綿をふき出す

のです。小児科医長をしておられた荒木昭一氏が、先鞭であり、当時、京都府立医大の助教授をしておられた建田恭一（たけだ）氏の所へ話をもちこまれたのです。

建田氏は、十中八九人為搬入であるとされ、それを福知山の症例が、手を使えぬようにすると綿が出なくなることで実証されました。この例は荒木氏のたくみな（綿のたたりだから、と小量の綿をにぎらせ、その上から包帯でくるんでしまう）治療法で完全になおり、だれも傷つかずに喜んで退院してゆきました。後にニコニコと明るく笑って、あいさつに来たそうです。この荒木医師のとられた手段には今なお感銘をおぼえます。

やがて、建田氏は田尻氏の症例を実際に見るために林野を訪います。他にヤジウマ２名。山のような産出綿と、外科教課書にものったこと、二国氏が外国の学会で話されることなどうかがった後、病床で綿の産出を見守られましたが、終に綿産出の現場にはあえず。

この詳細な報告が、自然　４０年７月号にのりました。この頃からです、二国氏の建田氏への攻撃がはじまったのは。名ざし※を含めてただちにそれとわかる小文が、多小、高圧的なニュアンスで、いろんな小冊子にのりました。片方は国立大・付属研の教授であり、片や助たる（と言っては叱られるかな。転出されておりました。）一私女子大の教授でしかありません。阪大微研は、はじめから一枚かんでおりました。もちろん、一部の方でしようが、外からは「微研」という風に見えても仕方ないでしよう。その微研の釜洞 淳太郎氏（後、阪大総長になられました。）までが、攻撃の小文を書かれたのは忘れられません。二国氏にとっては建田氏は酵素突然変異説という大学説の根底をゆるがす悪人です。多少の攻撃を加えられるのも止むを得ないことでしよう。しかし、釜洞氏は、おそらく二国氏の友人であられたであろう以外は関係はないはずです。

各地の患者のうわさも消えました。染色された線維まで出てきた、というのもありました。そして、林野の症例だけが残りました。やがて、そのうわさも少なくなりました。新聞紙上でしたか、微研がこの患者を入院させたというううわさ、極秘にしているというううわさ、綿搬入は確かめ得なかったが、微研もまた搬入説に傾いた、というううわさ、など聞えてきました。

年もかわって、４１年８月５日、突然、読売紙は大きな紙面をさいて、二国氏と田尻氏の討論をのせました。田尻氏はなおも種子迷入説かの如く、そして、おどろいたことは、二国氏は非証明という外部搬入を匂わせて、田尻氏をきめつけられていたことです。酵素突然変異説など始めからなかったように。

その後、岡大の外科に興味を持たれた方が居られ、患者さんをひきとられた、と聞きました。真疑をたしかめようとしたのですが、関係者の口は固く、何も聞きだせませんでした。しかし、「犬は吠えても」を引用させていただくなら、この婦人は健康体にもどられ、元気に、平穏に暮しておられると思います。

※　「蛋白質・核酸・酵素」　１０：１０１０、　１９６５

蛇　足：綿の種子が、あの線維を作るためのしくみは、ワタという植物の長い歴史の積み重ねによってのみ作られたものです。たとえ種子が人体に迷いこんでも、その形にふえるはずもなく、たとえ、酵素が少々変ろうが、　れが人体の中で線維素分子というならまだしも、真正の綿を作ろうはずのないことは、一寸まともに生物という物を見ていたら、わかるはずでしょう。生物の歴史性を忘れた生物学のみせた一側面でした。分化しきった生物学と、それを支える権威主義の反映でもありました。

かつて「科学画報」の創刊から余り遠くない頃（大正末〜昭和、「科学知識」だったかもしれない）、ワラから綿を作った発明の記事がありました。その綿を調べた技術者（氏名不詳）が、余りにも本当の綿であることに疑問をもち、外からいれられたというそのインチキを見破った話です。綿ふき病の当初の努力は、それが人体から出てくる不思議のうらづけに、如何に、それが本当の綿線維であるかの証明についやされました。変ですねえ。仇のあかでものませてやりたい、という月並な表現はやめて、これが５０年の科学の進歩、近代化の結果であるとしたら、何をしていたのやら。

蛇　足　２：（ヘビは四足だからまだまだ）：そんな痛いことを本人がするはずがない、に関連して。大体、この「常識」がもっと平凡な「常識」を狂わせたのですから。

かつて、東京帝国大学の眼科教室に河本重次郎という大先生が居られました。この方は「眼科小言」という小文を沢山残しておられるその中に、「石の涙」というのがあります。結膜のう――つまり目の中、（眼球内ではありません）に石粒を入れた人の話です。はるかなる国、とおい昔の話と思っておりましたら、うちでも一例、荒木敬二君（奇しくも昭一氏の弟）が出あわれました。目の中から砂がジャラジャラ。少年のポケットの中に、同じ砂があったのでチョンとなりました。これがカンラン石か何か一種だったら、酵素の突然変異てなことになりかねぬところ――まさか――ですが、残念ながら諸種鉱物の混った普通の砂でした。多種の酵素が同時に変異したら、もっと面白いなんて言わないで下さい。

少年にとって、目に砂を入れねばならなかった事情はわかりません。しかし、目の中に入れても痛くない、ということは、たとえばなしではなくって、狂った意味でも現実にありました。林野の女性が、なぜ、綿を入れねばならなかったかもわかりません。しかし、おそらくは、そのニュースを媒介として、綿ふき病がひろまった、という事実は、そういう立場に立つ――おそら

※　蛇足の６本目の指。この先生の論文には「ヨ――１人称代名詞――は門弟〇〇をして－－なさしめたり」といったのがあったり、ヨが知らんのだから、そんなことはあるはずがない、といった学会発言があったり、天がわれに文才とひまと寿命をあたえたもうたら、河本重次郎伝をかきたいくらいです。
（異説）

くは追いこまれた人が、ゴマンとはゆかなくても、沢山潜在しておられる、ということであります。話がシメッポクなりましたので、終りとします。

もう一昔をこえました。世間が綿ふき病を忘れたように、建田氏は別として、関係者の多くは、とっくの昔に、そんなことあった事すら忘れられたでしょう。もちろん建田氏にひとことあったこともありません。釜洞氏も先日、幽明境を異にされました。

はじめは記憶だけで書くつもりでしたが、事情が変り、少し追記します。

林野の例は、昭和３２年５月、田尻病院に入院、田尻氏の発表は、昭和３５年２月８日、日本医事新報（１８６９）ですから、３年弱、氏の慎重ぶりが偲ばれます。

二国氏がタッチされた時期はわかりません。国際学会というのは、昭和３８年、国際炭水化物シンポジウム（ミュンスター）で、「世界の注目をあつめた」由です。そらそうでしょう。

新聞、週刊誌にとり上げられたのは、もちろん（例：ヤングレディ　４１年３月１４日号）ですが、多くの少年少女雑誌（例：少年キング　４０年１０月２４日号）までが猟奇をあおったのは困りものです。読売紙の二国氏との、結着の記事は、８月２４日週間読売にまとめられていますが、５日の記事の次日６日、岡大、砂田外科へ入院、再解明にのり出す、の記事があります。このあとの消息が不明なのです。

単行書としては、昭和３９年１１月現代書房刊の「日本の奇病」があり、水俣病や、イタイイタイ病と並んでいます。この時点では止むを得ないことかもしれません。この項は田尻氏が書かれ、全体の編者は、松田心一・横川宗雄両氏です。

北杜夫氏の小説「奇病連盟」にも、建田氏らしい人物が、正当な評価の下にあらわれます。（朝日紙、昭和４１年１１月２１～２２日）

外科の教課書は積極的にはさがしませんでした。

こうやって、古い記憶をよびもどし、カビ臭い古い記録をくっておりますと、科学での「実証」ということばが、実に、いろいろな段階で使われていることを感じます。

（１９７８年４月２０日　受領）

[redacted]

日本生物学会誌　第3号　1978

魚　陸に　上る　(2)

―― 魚から人間までの歴史 ――

奥野良之助

第1章　魚の起原　(続)

2　分類系統学

さて、生物学において、「起原と発展の歴史」をさぐることを目的としている「学」はふつう分類系統学といわれている。分類系統学とは読んで字のごとく、生物を分類しその系統をさぐる学問である。といったって、これだけでは、わかる人にはわかっているし、わからない人には何のことかわからない。少し説明を加えよう。もっとも、私だって本当にわかっているのかどうか怪しいものだが――怪しくない、という説もある――そこは大学教官、わからないことを、わかったふりをしてしゃべることにはなれている。

分類というのは、生物学にかぎらず、だれでも日常やっていることだから、比較的わかりやすい。切手の収集家なら、集めた切手をたえず分類整理しておき、必要があればどんな切手でもすぐとり出せるようにしておくだろう。お金の収集家も、お金の分類整理をしているのかもしれないが、これは経験がないので知らない。

分類の分は、字のとおり分けるということであり、類の方は、類をもって集まるというように、集めるということである。したがって分類とは「分けて集める」ことである。

さて、分けるには、ひとつの基本的な単位が必要である。切手にせよお金にせよ、図柄とか数字とか、何らかの特徴によって、もうこれ以上は区別できないという限界がある。一万円札はどれでも一万円札でみんな同じである。もっとも、「また帰って来いよ」と書いてあった一万円札をみたことがあったが、こうなると話は少々ややこしくなる。もうこれ以上区別できないという最終の単位を一般に“種”という。一般に、といっても、一般に使われているわけではないが、アリストテレスがそう決めた。生物学ではそれをそのままいただいて、もうこれ以上お互いに区別できない生物を“種”（スピーシーズ）と呼ぶことになっている。トラは1つの種だし、マダイもまた1つの種である。となりのタイはうちのより大きい、というように、同じマダイでも区別することはあるが、生物は成長するものだから、大

きさは区別のメルクマールにしないことになっている。

というように書くと、生物の種なるものが、一万円札や50円切手のように、パッと見たらパッとわかる、はっきりしたもののように思えてくるが、またそう思わすのが大学教官の腕であるが、本当はそうかんたんなものではない。"種"なるをのは生物学の七不思議――そんなものあったかな――の第1にあげてもよいくらいのもので、ここ2～300年もの間、常に問題にされ、ある高名な学者はないと言い、別の高名な学者はあるとのたもうて、いまだに結着がついていないのである。かの有名なチャールズ・ダーウインは、その名著「種の起原」の中で、「ある生物を種とするか変種とするかを決定するには、健全な判断力と豊富な経験とをもつ博物学者の意見のほかには、たよりになるものがないように思われる。しかるにわれわれは多くの場合、博物学者の多数決で決めねばならない。」（八杉龍一訳、岩波文庫版、上巻67ページ）と、大変民主的な種の定義を与えている。私が習ったある先生は、「種とは、生物学（分類学）を10年やったら、何となくわかってくるものである。それまで待ちなさい」と、学生の意気をソソウさせる、あるいはフンキさせる、意見をのべられた。

では、種なるものがなぜそんなにはっきりしないのか。それは、いうまでもなく、生物というものは、同じ種に属していても、個体によってみんなごくわずかづつちがうからである。人間も、ヒト（ホモ・サピエンス）という1つの種であるが、ヒトはすべて1人づつちがっていて、全く同じ人間はいない。下等な生物では、人間ほどのちがいはないが、それでもやはり微妙に異っている。同種内のちがいを、種内変異、あるいは個体差というが、個体差こそ、つくられたもの、すなわちお金や切手とちがう、生物の1つの特徴といってもよい。

種内変異にもいろいろある。ウロコが1枚足りないとか、毛が3本足りないとかいった、単なる個体差もそうだが、その種の分布の中で、地方地方で同じ変異がおこっているときは、地理的変異といい、それが相当はっきりしている場合には、亜種（サブスピーシーズ）ということもある。相当というような"非科学的"な言葉を使って申しわけないが、どのくらいかわっていたら亜種とするといった基準が決っていないのでやむをえない。それがさらに"相当"ちがうと、別の種となる。この区別もあいまいなのだが、種の区別には1つだけ、とっておきの手がのこっている。つまり、かけ合わせてみて、子供が産まれなければもちろんだが、たとえ産まれても、さらにその子供ができなければ、両者は別種ということになる。雑種が繁殖可能でどんどん増えれば、両者がつながってしまうわけで、別種にしておく意味がなくなる。白人も黒人も黄色人種もすべてホモ・サピエンスであることの、ひとつの、そして決定的な証拠は、いわゆる混血児に存在する。この区別ははっきりしているようであり、事実、種を区別する唯一の決め手になっているのだが、実際にやってみると、やはりあいまいなところがのこる。カエルの例だが、雑種第一代ができて、それ同仕かけ合わせて第二代をつくると、死亡率は大変高いのであるが、それでも少しは生き残るといったケースが出てくる。こうなると、また何

%以上とか以下とか、あるいは“相当”とか非科学的な言葉を使わなくてはならなくなる。なかなかうまくいかないもので、どうやらダーウインの“多数決”がいちばん良いのかもしれない。

とはいえ、種はそれでも存在する、というのが、現代の生物学では大勢を占めている。また、種はあるということにしておかないと、他の分野でも本当はそうだが、特に分類学は成り立たない。なぜなら、もしないとなると、すべての生物を個体にまでわけてしまわねばならなくなって、収拾がつかなくなってしまう。そこで、我々も、種は存在すると信じることにしよう。

さて、生物をわけていって行きついた先が、少し怪しいところもあるが、種であった。これが、生物の分類の単位である。単位が決まれば、次は“集める”という作業にとりかからなければならない。分ける作業は、ちがいをみつけていくことであった。集めるときは、逆に、似ていることが基準となる。マダイとチダイは、ちょっと見たくらいでは、あるいはじっくりと見ても、区別つけにくいほどよく似ている。しかし、マダイとトラの区別がつかないという人は、万物一致、黒白平等を説いた、古代中国の哲人くらいなものであろう。これがすなわち、“類をもって集める”ということである。ついでにいうと、この“類”という概念もまた、種と同じくアリストテレスの創案による。かれは、類と種という2つの概念を使って、天地万物ことごとくを分類してしまったのである（本当かな？）。

ところで、種の似方、異なり方には、さまざまな程度がある。そこで、類概念の方は、種とちがって、1つでは足りないことになる。後でまたくわしく話すことになるだろうが、分類学の父リンネは、界・綱・目・属の4つのカテゴリーを採用した。似た種を集めて属をつくり、似た属を集めて目を立て、似た目を集めて綱となすのである。綱までいくと、例えばホ乳類は1つとなる。その上の界は、リンネによると3つしかなくて、動物界・植物界・鉱物界である。宇宙のすべてはこの3つの界の中におさまる。はいらないものはただ1つ、それは神様である。

リンネの時代には、まだ記載された種の数が少なかった。現代でも分類学の出発点とされている、リンネの書いた「自然の体系」第10版に載せられている種は、わずかに4236種にすぎない。それがいまや、植物30万種、動物100万種といわれているほど増えてきた。とても4つ位の類概念では足りなくなる。そこで、界の下、綱の上に“門”がおかれ、目と属の間に“科”が増やされた。基本的なカテゴリーは、したがって6つとなる。もっとも、界というのはこのごろあまり使わない。その程度の増加ではとてもおっつかないので、それぞれのカテゴリーに、“上”とか“亜”とかをつけて細分していくことになっている。こうすると、1つが3つとなるから、6×3＝18もの類ができる。門・亜門・上綱・綱・

亜綱・上目・目・亜目・上科・科・亜科・上属・属・亜属、といった調子である。種は基本単位であるから、上種というのはない。そのくせ亜種というのがあるのは矛盾しているが、やむをえないとはいえ、これは本当はまちがっているのである。

さて、分類学というのは、以上のように、単位である種まで分けたのち、似たものを順次集めていって類を立てていく作業のことであり、いかにして美しく見事に整理するかによってその評価が決った。切手の分類整理と全く同じことである。ところが、時代が進んで19世紀にはいると、それではすまないような事態が生じてきた。その責任者は、まずラマルクであり、次いでダーウインである。かれらは、生物が神様によってつくられた不変のものではなくて、勝手に変化し進化し退化していく"生き物"であると主張した。同じことを言ったのだが、ラマルクは軽べつされ、ダーウインは尊敬されたのではあるが。そうなると、種が似ているということは、神様のいたずら、つまり偶然ではなくて、近い親縁関係、つまり類縁を示しているにちがいないということになる。そこで、それまでは適当に似ているものを集めて箱にいれておけばそれですんだのに、これからは、種の間の血のつながりの状態まで調べなくてはならなくなったのである。こうして系統を調べる学問、系統学が生まれた。分類学は、分類系統学へと出世、はおかしいかな、したのである。分類だけなら、いかにたくさん種がいようとも、いつかは完全に終了する。ところが、血のつながりなどという怪物は、いつまで研究したって終るはずがない。ある学者がこれとこれとは近縁だといえば、別の学者が、いやちがう、といえばよいのである。かくして、分類系統学者の仕事は、永久に保障されることとなった。

さらに、ラマルクとダーウインは、生物というものはこのような血のつながりをとおして、単純なものから複雑なものへ、低次の段階から高次の段階へと進んで行くことを明らかにした。いわゆる生物の進化である。それは、生命の起原に始まり、人間社会の出現に終る、２０億年を越える壮大な歴史絵巻である。その中に、生物の種・属・科・目・綱・門が次ぎ次ぎと登場し、あるものは主役として輝かしいフットライトをあび、あるものはわき役としてしぶい演技に満足し、そしてまた別のものは、ほんのちょい役としてその生涯を終ることになる。主役はいつしか交代し、それにともなってわき役も変っていくが、どういうわけか端役だけがえんえんと時代をこえて生きのびることもある。カッコいい役もいたし、悪役もいた。悲劇の主人公もいれば、三枚目を心ならずも演じたものもいた。

これが、生物の起原と発展の歴史である。アリストテレスにしたがえば、これを知ってはじめて、生物の本質を理解することができることになる。魚の本質を知るには、魚の、ひいてはせきつい動物の進化の歴史を知らなくてはならぬ。

というわけで、これから「せきつい動物の進化の歴史」を話しはじめようと思うのだが、その前に、分類系統学の歴史の方を、ちょっとのぞいておこう。

３　アリストテレスからダーウインまで

すでにのべたように、分類学は生物を分けることからはじまる。人間の先祖として確実なのは、ジャワ原人や北京原人、つまりピテカントロプスであるが、かれらは植物を採集しシカなどの動物を狩っていた。この狩猟採集は、その後のネアンデルタール人や、我々と同じホモ・サピエンスであるクロマニヨン人にもひきつがれ、ゾウなどの大動物さえ狩るようになった。自分より大きく速く強い動物を狩るには、その動物の習性をよく知らなければ不可能である。動物の習性は、種によって決っている。とすれば、かれらには、習性をとおして、種の認識ができていたにちがいない。そしてその認識は、少々まちがっても何ということのない現代の学者のそれよりも、ひとつまちがえば命にかかわるだけ、ずっと深いものであったにちがいない。

しかし、かれらはその分類の知識を、体系づけて書いてのこすといった、ムダなことをやるほどヒマではなかった。そういうヒマ人が出てきたのは、もっとも古くはインドであり次いで古代ギリシャであった。

古代インドの分類体系：ひとつの例を示しておこう。時代は紀元前６００～５００年というから、アリストテレス（紀元前３８４～３２２）よりもまだ古い。チャラカという人が考え出したものだそうである。チャラカという人がどんな人であったか、なにぶん古い話でよくわからない、ことにしておこう。

1　ヤラユージャ（胎生）：子宮から生れる動物―ヒト、ほ乳類

2　アンダージャ（卵生）：卵から生れる動物―魚類、は虫類、鳥類

3　スヴエダージャ　あるいは　ウスマージャ（湿熱生）：湿気と熱から生まれる動物―ミミズ、蚊

4　ウブヴイージャ（野菜生）：野菜から生れる動物―（例なし。チョウチョウのようなものか？）

分類の基準はいわずとも明らかであろう。胎生と卵生はいまでもひとつの基準としてよく使われている。湿熱生と野菜生は、いまの常識からはいただけないが、熱と湿気から生命が生まれるという考えは、ヨーロッパでもごく最近まであった。野菜生というのをつくったことは大変面白い。おそらく、たんせいこめてつくった野菜を、いつのまにかわいてきたアオムシに食い荒らされ、腹を立てた人の分類にちがいない。胎生に、ケモノと並べて、ヒトをいれたのは、非常な見識である。ヒトだけは別、という考えを打ち破ったのは１８５９年のダーウインの「種の起原」であった。そしてなおかつ、ダーウインは大変おこられた。しかし、紀元前６００年のインドの人チャラカ氏は、自己の立てた基準、胎生・卵生に、忠実

に従って、敢然とヒトをケモノの仲間にいれてしまったのである。その勇気は大いに評価しなくてはなるまい。もっとも、そのころはまだ、キリスト教はなかったから、ヒトをケモノの中にいれても、だれもおこらなかったのかもしれない。

ギリシャにうつろう。ここではどうしても、アリストテレスが出てくることになっている。なにしろ、天体の運行からワニの口の中を掃除するチドリの話まで、そして論理学・倫理学・社会学・政治学等々、学と名のつくものはすべてあつかった人だから、いたしかたがない。

アリストテレスの分類体系：アリストテレスは、その先生のプラトン、あるいはそのまた先生のソクラテスのように、天下の学者諸先生のところへのりこんでいってからかったり、若者を集めて、あることないことといろんなよからぬことを教えては喜こんだり、いわゆる"対話"の中から真実を見つけ出すといった方法はとらなかった。かれはまず、自分の手でさまざまな動物を解剖することからはじめた。当時のギリシャ社会では、自からの手を汚す仕事は、ドレイのすることと決っていたにもかかわらず。さらにかれは、いろいろな人の話を集めて、動物に関する膨大な事実を集積した。それを書き誌したのが「動物誌」（島崎三郎訳「アリストテレス全集」第7・8巻、岩波書店）である。この中にはじつにさまざまな動物の、大変面白い話がいっぱい出てくる。ただそれが、単なるお話に終っていないところがアリストテレスのアリストテレスたるゆえんのところであって、たとえば、ウナギは泥から生まれるということも、それ以外に考えられないという証明をちゃんとつけている。まず、ウナギをいくらつかまえて腹をさいてみても、卵が見つかったためしはなく、ひとつの池を干し上げてかわかし、水をいれておくと、いつのまにかまたウナギがすみついている。泥から生まれるよりしようがないではないか、といった調子である。けなげにも、アリストテレスを勉強しようという気をおこした不幸な若者は、私もそうだったのだが、たいてい「形而上学」あたりにいきなりとりついて、10ページもいかぬうちにダウンすることになっている。「動物誌」あたりから始めるのが、生物好きの人なら、ひとつの方法であろう。ただし、「動物誌」は、むつかしくはないがたいくつする。適当にとばして読んだってかまわない。もっとも、「動物誌」を読破したからといって、次に「形而上学」を読んで理解できるという保障は、なにもない。

さて、アリストテレスは、５００種にものぼる動物を、「動物誌」の中でとり上げている。聞いた話もあり、そのすべてを自分で直接手にしたわけではないが、その経験をもとにして、ひとつの分類体系をつくり上げた。次のとおりである。

A　有血動物

1　人類

2　胎生四足類

3　卵生四足類

4　鳥類

5　魚類

B　無血動物

1　軟体類――（現在の頭足類に当る）

2　軟かく類――（甲かく類）

3　有節類――（こん虫、クモ、ミミズ等）

4かく皮類――貝、ウニ、ホヤ等）

5　植虫類――（きょく皮、こう腸、海綿）

アリストテレスは、まず、動物を二つにわける。有血動物と無血動物である。かれは、いまでもそうだが、血は赤いものと考えた。赤くない血をもつものは、したがって、血をもたないことになる。いまでいうせきつい動物は、血球にヘモグロビンをもち、血は赤い。だから"有血動物"である。無せきつい動物は、ヘモチアニンで、だいたいにおいて血は青い。そこで"無血動物"となる。もっとも、ミミズの血は赤い。この基準では有血動物にいれなければならぬ。アリストテレスほどの人が、それを見落すはずはなかろう。してみると無視したにちがいない。都合の悪いデータは無視するというのは、現代の科学者の常識である。その常識の起原も、どうやらアリストテレスまでさかのぼれそうだ。

有血動物の方から見ていこう。インドのチャラカとちがって、ここでは人類がはっきり別にされている。それには理由があって、それはまた後で説明しよう。それ以外の有血動物つまりせきつい動物は、胎生四足、卵生四足、鳥、魚の4つに分けられている。これらはそれぞれ、現在のほ乳、両生は虫、鳥、魚類にほぼ当っており、せきつい動物に関するかぎりその分類はアリストテレスがおおむね完成したと考えてよい。両生類とは虫類が分けられていないが、この2つが分離されたのは1845年というから、いまよりわずか130年くらい前のことにすぎない。ついでにいうと、この2つを分けたのは、K。T。シーボルトというオランダの学者で、「花神」の大村益次郎の恋人、おいねの父であったP。F。シーボルトのおじさんに当る人だそうである。さらに最近になって、魚類がまた4つ、あるいは人によっては10くらいに分けられるようになった。でも、現在でも、面倒くさいときは、せきつい

動物はほ乳類・鳥類・は虫類・両生類・魚類の5つである、てなことを言ってすませてしまうこともある。ただしそのときは、“綱”という正式の分類カテゴリーは使わず、“類”を使っておく。そうすればまちがいとはならない。“学者”の芸のこまかいところである。

アリストテレスは、足がないのにクジラをほ乳類にいれていた。これは、当時としてはなかなかの見識である。同じころつくられた聖書の中では、ヨナをのみこんだクジラのことを“大いなる魚”とのべている。日本でもクジラやイルカはずっと魚としてあつかわれてきた。私と親しかったある漁師は「イルカは変な魚や。体が温い」といっていた。「そら当り前や。イルカはケモノやもん」と説明したがなかなか承知しない。標本のおへそと乳房を見せて、やっと納得してもらったことがある。市場へいっても、クジラの肉は肉屋さんにはなく、魚屋さんに並べてある。いまだによくわからないのは、ときにそれが川魚屋さんにおいてあることである。

ところで、日本では昔から、魚は食べ物と決っている。数年前、東北地方へ旅をして、八幡平国立公園の“大沼ロッジ”という国民宿舎にとまったことがある。そのロビーに、この付近で一木一草、一鳥一虫（とは書いてなかったが）といえども採ってはならぬ、採った者は罰せられる、という大きなはり紙がしてあった。宿舎のすぐ前には、大沼がある。そのまわりには高層湿原が広がっていて、ここにもまた、一歩たりといえども観察通路から足をふみはずすことを禁ず、という看板が立っていた。おそるおそる“拝観”させてもらっていたのだが、沼のほとりに一軒のみやげ物店があり、そこの立て札を見たときには、思わず吹き出した。“ボート貸します”に並んで、そこにはこう書かれていたのである。“釣道具、餌あります。”

日本人の感覚としては、魚は“食い物”なのであろう。ヨーロッパ人が、ウシやブタのような家畜は、神様が人間の食料として下さったものだから、殺して食っても良心の痛みを感じないのと同じである。アフリカの狩猟民たちが、ゾウやシマウマをつかまえて食べるのも、同じ心情であろう。それを、“自然保護”の名を借りて、とやかくいう方がおかしいのではあるまいか。私は、このみやげ物店の看板を団固支持する！

壱岐の漁民が、魚を食い荒らす3万頭以上のイルカに頭にきて、1000頭をおいこみ“ボク殺”したということが反響をよび、ヨーロッパやアメリカ、それにその尻馬にのった日本の自然保護団体から集中攻撃をあびている。日本では昔から、イルカは魚である。魚をつかまえて殺すことは、天下の国立公園の中でも公認されている。ましてや相手は、生活の糧である魚を食い荒らすにっくき“害魚”である。犬公方綱吉の生類あわれみの令の復活ではあるまいし、壱岐の漁民よ、遠慮はいらない。大いにつかまえて“ボク殺”しよう！

ついでに、無せきつい動物の方もちょっとふれておこう。頭足類（タコ・イカ）、甲かく（エビ・カニ他）、こん虫などは正しくまとめられている。頭足と貝類を別にしたのはやむをえないだろう。私たちは、教えられて信じているが、目の前にアサリとタコを並べられたら、ちがうというのがふつうの感覚で、同じだというのは異常である。無せきつい動物の分類は、このあとかえって退化していく。分類学の父として評価の高いカール・リンネなどは、こん虫綱とぜん虫綱の２つにしてしまった。ぜん虫というのは、英語でいうワームのことでややこしいものは何でもそこへつっこんでしまっている。きっと面倒くさくなったにちがいない。実は、このくらい神経が図太くないと、学者として出世しない。あまりこまかいことまで真実を追求していくと、ケンカにはなるが、論文は書けない。無せきつい動物の分類はさらにのちの、ラマルクまで待たなければならぬ。１８０９年に出た「動物哲学」の中で、ほぼ現在のものに近い分類体系が、はじめて確立された。

アリストテレスの分類の中に、植虫類というのがある。この中には、きょく皮（ナマコ・ヒトデ）、こう腸（イソギンチャク・クラゲ・サンゴ）、海綿がふくまれている。いまでは、きょく皮動物は、せきつい動物の先祖すじに当るものとされ、ずっと格が上って、分類表の中でも無せきつい動物の最後、せきつい動物の直前におかれているが、これまた、実物をながめると、むしろアリストテレスに賛成したくなって当然といったものである。動物ではあるが、これらはあまり動かず、植物的である。アリストテレスは、これらを、動物と植物の中間的なものと考えた。このあたりに、かれの哲学の基本的なところがよく表れている。

といっても、かれは、植物から、植虫類を経て、動物が生れてきたというような、“進化”の考えはなかった。さまざまな生物は、“自然”がより“完全なもの”つくろうとしてこころみた、失敗作である、というのが、アリストテレスの考えであった。“自然”が“完全なものをつくろう”という“目的”をもって、次ぎ次ぎに生物をつくっていき、最後に人間にいたるというわけなのだが、このアリストテレスの“目的論”が、キリスト教神学にとりこまれ、中世以降のヨーロッパ思想界を支配する。そして、力学の分野でガリレオ・ガリレイが、生物学の分野ではチャールス・ダーウインが、それを打破すべく、苦闘をくりかえすハメにおちいることになる。

もっとも、“神がすべての生物をつくった”というのは、キリスト教が支配的になってからの話であって、アリストテレスの場合は、神ではなくて“自然”であった。かれによると、“月の下”は自然が支配している。しかしその自然は、絶対的に独立しているものではなくて、天の支配者である“天球”の指図にしたがわねばならぬ。その天球でさえ、天の外側、というのはどんなところなのか想像できないが、にすむ“第一動者”の支配を受ける。

この第一動者こそが、"自らは動かされず、他を動かすもの"、つまり絶対的な存在であって、いまでいえば、神と同じものである。

アリストテレスの第一動者論は、とまた話が横すべりしていくが、はじめに神ありき、といった宗教的なものではなくて、論理的に導びき出されたものである。ものごとには必ず原因があり、その結果として生ずる。つまり、この世の出来事はすべて、因果の系列として考えることができる。すると、困ったことがひとつ生じる。何でもいいが、あるひとつのことがおこったとする。それには原因があるはずである。その原因もまた、さらに別の原因の結果生じたものでなければならぬ。こうして、因果の系列をかぎりなくたどっていくとどうなるか。長屋の八っつあんが物知り大屋さんのところへいって、「西へ西へドンドン行くとどうなる」「大きな海へ出て行きどまりだ」「その海を越えてドンドン行くとどこに出る」「高いカベがあってもう行けない」「その高いカベを越えてドンドン行くとどこへ行く」「モウモウとしたところに出てきてわからなくなる」「そのモウモウを越えてドンドン行くと……」と、困らせる話が落語にあるが、あれと同じでしまいには、原因なしの結果を仮定せざるをえなくなる。これがアリストテレスの"自らは動かされず、他を動かすもの"、いわゆる第一動者なのである。絶対的存在者であるという意味で、それは"神"とよんでもいい。もともとギリシャの神は、最高神であるジュピターにしてからが、若い乙女に浮気して奥さんのヘラに見つかり、あわててエジプトまで逃げていって、オウシに姿をかえてかくれるといった、"神"にあるまじき所業、言葉をかえると大変人間的で、だからこそギリシャ神話を私は好きなのだが、リクツリクツで押していくアリストテレスには、そんなだらしのない神様には辛棒できなかったのであろう。ここに、絶対的存在者としての神、のちのキリスト教の神が顔をのぞかせている。

もっとも、キリスト教の神エホバも、旧約聖書の時代には、ずいぶんいい加減な神様であった。自分のつくった人間が、勝手きままなことをするというので、例のノアのこう水をおこして、みんな殺してしまう。ひとり助けたノアが、こう水のあと、たき火の上に、脂でくるんだウシのもも肉をおいて、うまそうなにおいをたなびかせると、早速やってきて、ちなみにいうと、これはギリシャ神話の世界で神様をよび出すふつうの方法であって、さすがは肉食民族の神様だけあって、相当生ぐさいが、もうひとつちなみにいえば、我々米食民族である日本の神様は、神主さんが祭段に向って「オーーーッ」ととなえるだけできて下さることになっているのだが、やはり海の幸、山の幸をそなえねばならぬことになっているから、食べ物で釣る点では同じで、神様というものは案外唯物論的なものだとかねがね思っていたのだが、ともかく文章のつながりが、書いている本人にもわからなくなってきて難渋している。ウシのもも肉の焼けるにおいにつられてやってきた神エホバは、ノアに対し、いかに悪

い者どもとはいえ、全部殺してしまったのは行きすぎであった、もう今後はこんなことはしない、と、ノアに対して約束するのである。当節では、大学教授でさえめったにしない“白紙徹回・自己批判”を、こともあろうに神様がやっているのだから、権威のないことおびただしい。ただし、大変民主的で人間的ではある。

アリストテレスの第一動者論は、近代の哲学者、たとえばスピノザなども、神の存在の証明に使っている。さて、アリストテレスの宇宙観は、まずこの第一動者＝神が、天球を動かし、天球が月の下なる自然を動かす、という位階構造から成り立っている。社長一部長一課長という、会社の構造とそっくりなのが妙である。動かされてばかりの自然は、その腹いせに、というわけでもなかろうが、支配をまかされた月の下、つまり地上において、よしひとつ、完璧なものをつくって、神様をびっくりさせてやろうと、固く決意する。その“目的”にしたがって自然は、いろいろなものをつくっていくのである。

まずかれは、植物をつくった。だがこれは完全なものどころか、完全な失敗であった。植物には“魂”をいれることはできた。つまり、生きているということである。ところがその魂は、自らを養うのにせいいっぱいで、ほかに何もできない。

次に自然がつくったのが、動物である。これは、植物にくらべると、格段に進歩したものであった。もちろん魂をもち、自らを養うことができるし、その上、たとえば何か食べたいというように、自ら欲望することもできるし、さらに、その欲望を満たすために動くことさえできた。しかし、自然は満足できない。もっと完全なものがあるのではなかろうか。このあたりの、“自然”の動きは大変面白い。失敗してもくじけず、さらに良きものを目ざして、ムダな努力をつづける。しわよせを受けつつ、それでもなお上を目ざしてがんばらなくてはならないという、中間管理職の地位のせいであろう。

そして自然　　に人間をつくった。自らを養い、欲望し、動くだけではなく、人間は理性（ヌース）というものをもち、ものを考え、正邪の判断ができる。これこそ完全なるものであろう。もっとも、伴断のとおりにいつも動いてくれたら、完全なるものとしての人間を受け入れてもよいのだが、正しく判断しても、決してそのようには動かない、むしろ逆に動くのが人間であり、アリストテレスには悪いが、額面どおり受け入れるわけにはいかない。

しかし、さすがはアリストテレスである。その辺のことはちゃんと見抜いていて、人間すべてが完全なるものではないという。自然のつくった最初の人間は、ギリシャ人以外のバルバロイ、つまり野蛮人であって、これはまだ不完全なものである。だから、ドレイにしてもかまわない、というより、ドレイとして生れついている、とかれはいう。次は、ギリシャ人のドレイがくる。そして、最後につくられた、もっとも完全なるものとして、自由ギリシ

ャ市民がくるのである。もうひとつ、つけ加えると、自由ギリシャ市民といっても、真に完璧なのは、男性だけであって女性はそうではない。あまり言いたくないのだが、女性は不完全な失敗作なのである。これはアリストテレスがそう言っているのであって、私は決してそうは思っていないことを、特にことわっておかなければならない。特にことわる場合は、本当は少々怪しいことが多いのだけれど。要するに、アリストテレスを筆頭とする、ギリシャ自由市民の男性のみが、"自然"のつくった"完全なるもの"であり、"自然の目的"そのものである、ということである。

ここまで言えば、アリストテレスの世界観の、底が見えたというべきであろう。古代ギリシャ、とくにソクラテス、プラトン、アリストテレスの三大哲学者のすんでいたアテナイつまりアテネは、民主的市民社会として有名であるが、そしてたしかに、独裁者をきらい、あまりにすぐれた人が出てくると、独裁者になることをおそれて、投票によって国外追放にしたりするほどであったが、本当はいわれているほど理想的なものではなかった。まずそれは、徹底的に男尊女卑の社会であった。ソクラテスの奥さんクサンチッペの悪妻ぶりがあまりにも有名で、アテナイ社会は男女同権であったかのごとく思われているが、男女同権の社会と恐妻家の存在とは、本質的に関係がなく、両立するものであることは、現代の日本を見れば明らかであろう。アテナイでは、子供が生れたとき、女の子であれば喜ばず、男の子であっても母親似であればやはり喜ばず、父親似の子供が生れてはじめて盛大にお祝いしたと伝えられているほど、ひどい男女不平等社会であった。次いでそこにはドレイがいて、その労働の上に、学者がヒマをもてあまして、さまざまなリクツを考えては暮んでいた社会であった。もっとも、この点も、現代社会と似ていなくはない。さらにその外側にバルバロイがいた。強大な帝国ペルシャを撃退して意気上るアテナイが、エーゲ海に浮ぶ小さな島メロスへ攻めていき、そこでどんなひどいしうちをしたかを、アテナイを国外追放になって亡命しながら書いたといわれる、トウキュデイデース（ツキジデス）「戦史」（久保正彰訳、岩波文庫版）の中に、生き生きと描写されている。圧倒的な軍事力でとりかこみ、講和をすじみち立てて説くメロス島の代表をおどしつけ、しまいには男は全部殺し、女子供はドレイにしてしまうのである。これが「メロス島問答」として有名な一節で、古代ギリシャを尊敬している人は、是非とも一読しておかなければならない。

アリストテレスの世界観は、以上のような古代ギリシャの社会の状態を、そのまま投影したものにすぎない。神様が人間をつくったのではなく、人間が神様をつくったのだ、といったのは、マルクスかエンゲルスかどちらかだったと思うが、まさにアテナイ社会がアリストテレスの世界観をつくったのである。しかもアリストテレスは、それをそのまま肯定し、まったく批判していない。その社会を、むしろ合理化しているだけである。これは、アリス

トテレスがその社会の中で、いちばん上の位置にいたからにちがいない。もしドレイに語らせれば、もっと真実を語ったことであろう。残念ながら、ドレイの学説はまったく残っていない。アリストテレスほどの人ですら、こうである。現代でも学者は、相当下落はしているが、まだまだ社会の上層部にしがみついている。その言うことが信用できないのは当然というべきであろう。それはともかく、“自然”の目指した“完全なるもの”は、アリストテレスに代表される自由市民で完結することになるのだが、それがこれでは、“自然”の実験はまだまだ終っていないといわなければならない。

さて、アリストテレスは、社会の反影であるこの考えを、動物・植物にもおよぼしていくのである。したがって、かれの分類体系は、一見すると、高等なものから下等なものへと順番に並んでいて、進化を示しているように見えるが、本当はそうではなくて、自然のつくっていった順序を示しているにすぎない。こういう考え方をふつう“自然のハシゴ”という。これは、中世をとびこして近世までつづき、たとえば18世紀のスイスの学者ボネー（１７２０～９３）がそれで有名である。ボネーといえば、精子の中に小さな小さな人間がはいっていて、発生というのはそれが大きくなるだけだという、“入れ子説”をとなえた人としても有名であるが、この説にしたがえば、精子の中の小人の精子の中に、さらに小さな小人がはいっていなければならず、以下同様、世界のおわりまでの、これから生れてくる人間は、すべてすでに、一つの精子の中にふくまれていることになる。哲学的には、このような考え方のことを“前成説”という。最近、殺虫剤が次第に効かなくなるのは、虫が次第に抵抗性をもつようになるのではなくて、虫の一部にあらかじめ、人間のつくるあらゆる殺虫剤に対する抵抗性をもつような遺伝子（DNA）がすでにそなわっているからだという説があるが、これなど前成説の好例といえよう。ついでにいうと、ボネーが、大きな卵の中にではなく小さな精子の中に子供を想定したことから、ボネーもまた男尊女卑の考えをもち、その社会もまた男女不平等社会であり、そしてボネーがその中で、めぐまれた社会的位置にいたことまでわかってしまう。

このままつづけると、「会長は人の会費を集めて、自分の論文にみな使ってしまう」と文句が出そうである。アリストテレスはこの辺で打ち切って、中世もとばして、一足とびに近代に進むことにしよう。

（つづく）

"手　記"　「ある生態学徒の堕落」　(1)

蜂　巣　雲

桜にはまだ早い北国の春のある日、私は、石川門ではなく、黒門をくぐり、生態学講座の専攻生として、金沢大学についた。遠い南の国長崎から、仙台での生態学会をのぞき、延延3千キロに及ぶ旅であった。

私の着いた生態講座は、今年（このとし）出来たばかりの新設講座であり、そこには、水生こん虫とかハチとかで著名な、大串龍一という教授と、魚類の行動・習性の研究を行ない、「磯魚の生態学」という著書のある奥野良之助という助教授が居た。共に京都大学では、「適応変異研究グループ」と「海洋生態研究グループ」の一員として活躍した科学者であった。

そして私は、大学時代、淡水ではあるが魚と、その餌であるところの水生こん虫を扱ってきたので、この金沢大学で私の研究をより発展出来るであろうと思い、汽車にゆられて来た訳である。

〈生　態　講　座　の　人　々〉

大串教授は、学生に対して非常に理解のある先生であった。私の希望したテーマ「水生こん虫の流下」は、大串教授の興味とも一致するらしく一も二もなく承認された。そして他の学生（院生、四年生）もそれぞれ各自の希望するテーマを認められていた。こんな事は以前いた大学では、ほとんど見られない光景であった。

春から夏にかけて私は、同じ興味を持ち、その事を楽しく話し合える大串教授の部屋へ日参するようになった。大串教授の部屋には、常に日々訪れる学生のために、コーヒーが用意され、時には、あの"森八"の黒羊かんがおいてあった。我々学生にとって、教授との気楽な接触と、かわいた咽喉を潤すという両方が大串教授の部屋ではかなえることが出来た。もう一人の先生、奥野助教授の部屋にも常時、数人の学生が集まっていた。しかし、こちらに集まっている学生は、院生とか、専攻生とか、古株の人が多く、大串教授の部屋のアカデミックなふん囲気とは異なり、にぎやかに冗談を飛ばしながら、難しいお話をしていた。そして私の様な新参者が入っていくと、話のさかなにされるのがおちであった。奥野助教授の部屋にもコーヒーは

あったが、黒羊かんがあったという記憶はない。

学生の世話をするという点において、奥野助教授より大串教授の方が数段上であった。そして様々な文献の数においても、奥野助教授は大串教授に及ぶべくもないことはさりながら、その整理能力において、天と地との差があった（これは現在も同じであろう）。大串教授の文献は、その著者さえわかれば、即座にみつける事が出来た。そして金沢大学の図書館には生態関係の文献は皆無であった。必然的に私は大串教授の部屋で文献あさりをし、コーヒーのごちそうにあずかったというしだいである。

《私は良い環境の下で充分に研究が出来ると喜んだものである。》

さらに私を驚かせたことの一つに生態講座の人々の真面目さ、博学ぶりがある。ハエの権威にはじまり、魚、クモ、鳥、カミキリ、ウサギ、植物、海岸動物、とそうそうたる面々である（競馬に精通していた人もいたが）。そしてそのすべての人々が、良く知っていたし、「生態学」なるものに、非常な興味を持って対処していたことは、「理学部の学生はかしこいなあ！」と思うには充分であった（皮肉ではない）。

〈もう一つの生物科〉

生態学講座とは離れるが、当時の生物科において重要な意味を持ち、私にも大きなかかわりを持つことになった生物科大学院会のことにふれておく。

真面目な学生（これはウソ）であった私は、生態の院生達ともしだいに、お近づきになるようになった。そんな五月のある日、院生達の甘いさそいに、何の抵抗もなく（院生でもないのに）院生会の会場へと足を運んだ。そこには、各講座の院生達がすでに集まっていた。私は好奇の目の注がれるなか、隅の方へこそこそとすわった。

年度はじめは、「今年は何をしよう」という話をするらしいのだが、「出席者が少なくて会が成立しないのでどうしよう」ということで、進展のない議論を3週間も続けていた。そして私は、院生達の欠席者への思いやりのある態度に感心していた。こんな状態だったので、私はこの院生会は普通の自治会とは異なり、思慮分別のある大学院生の集まりであろうと思いこんだのであった。事実その通りであった。

院生会の重要な仕事の一つに、教室会議の傍聴というのがあった。何だかわからんけど、古株院生の陰にはいって、いってみることにした。(これがいけなかった！)

生物科の教官達が何やら話していた。ほとんど知らない人達ばかりである。大串さんがいた！　奥野さんもいた！　大串さんはあまり発言せずおとなしくすわっていたが、奥野さんは新任のくせによくしゃべっていた。又傍聴の院生達は、教官が訳のわからんことをいうと、大きな声でやじっていた。「こりゃーおもろい」真面目な私は院生がする通り、真似をしてやじってやった。

大学の教官などといったら、いつも小むずかしい顔をしてすわっているのに、実際の議論といったら子供よりなお悪い。意地と欲のつっぱりあいである。これが大学の管理運営の現実の姿かと思うと、楽しくなってきた。

こんな事も大串教授とのコーヒータイムに話題になることもあった。大串教授は学生の主張に対し良き理解を示し、生物科の他の教授の批判すらするのである。「ここの教授は田舎にあるせいか古いですねえー」大串先生は本当に話のわかる人である。

しかし、この院生会の活動とのつきあいを重ねていくうちに、初めの「良い環境で充分研究が出来る」という考えが、何だか腰くだけになった様な気がした。

〈白　山　問　題〉

こんな時、大串教授から「今まで京大中心でやってきた白山調査に、地元である金沢大学にいる私（大串）も参加することになった、私は無せきつい動物を扱かうことになった。水生こん虫もやるから、もし良かったらいっしょにいきませんか」というさそいがあった。

生態を志す者なら必ずや知っている、あの有名な「白山総合調査」である。こんな機会はそうあるものではない。「金沢大学に来て良かった。ジーン」水生こん虫の調査というのは定性調査はともかく定量採集ともなると、かなりの労力を必要とする。「大串さんは何かと忙しいし、研究員のA さん一人では大変だろう。それなら、どうせまだ僕の研究の予定も立っていない時でもあるし、白山の水生こん虫相を明らかにする仕事の一助となろう。」と思った訳である。

8月6～10日（1972年）には、第一回白山調査が行なわれた。私はヤボ用があったので、Aさんと、大串さんにその旨断って参加しなかった。この時、大串さんは「今回は下見程度だからいいですよ」といってくれたので、別段心の負担になるようなこともなかった。この時の参加者は、生態講座の四年生と一部の三年生、一年生であった。

夏の調査も終り、生態の各部屋では調査に参加した人々が何か誇らし気に、白山の資料の整理を行なっていた。彼らの生き生きとした姿が若干うらやましくて、「秋の調査にはわしも行くぞ！」と決心した。ただ、三食旅館で食べて、風呂付きの採集には、調査、研究というものの神聖さがけがされたようでけんなりした。だがしかし、金のない僕らは、食糧もリュックにつめこんで、テントに泊って調査するとしても、金のある人がホテルに泊ったとしても、まあいいじゃないか。金があるということは楽なことだ。むしろ、参加者に重い荷物を持たせず、食事の心配もさせないことが、教授の甲斐性かもしれない。この点は秋の調査の時には早くも金が底をついたのか、自炊となった（別にどうってことないが）。

10月には待望の秋の調査である。このころから生態講座の内外で、白山調査に対する批判をちらほら耳にするようになった。しかし、私は、「人手が不足すると大変だから行ってやるんだ」「白山の生物を調べることのどこが悪い」と別に腹を立てることもなく、まして悩むこともな

く、あたり前の顔をして出発したのである。白山では、まじめに採集した。大串さんを囲んで簡単なミーティング、地図をひろげて明日はあの谷、この沢といった調子である。岩間温泉の紅葉が美しく、キノコがたくさんあったので、とってきて食べた。なかなか美味であった。大串さんは捕虫網を持って走りまわっていた。この様な素晴しい白山の自然の中で「白山総合調査」の仕事に私自身が加わっているという実感は悪いものではない。

大串教授の、金沢大学の学生を使っての白山の調査は、これが最後であった。その後、白山で大串教授が、捕虫網を持って走りまわっている姿を見たという人の話を聞いたことはない。

11月、秋も深まり、白山の資料を整理していたある日、北国新聞にスーパー林道の記事が載った。「スーパー林道の建設に当っては、自然保護の為、多くの配慮がなされている」という内容のものであった。この新聞記事に対して、白山調査に参加した学生が怒りをぶちまけていた。「スーパー林道建設は自然破壊そのものだ、"自然保護の数多くの配慮がなされている"なんてのはウソッパチだ」そして「白山調査が自然保護の根拠として利用されている。けしからん」というのである。私も白山調査には参加したが、感覚が鈍いのか、「何でおこっているのかようわからん」という状態であった。

これを契機に、生態講座内部で白山調査への参加に対しての批判が、ボリュームを上げてきた。「それみろ、白山調査はもともと、県に利用されるためにあったのだ。参加したものは県の"自然保護"に加担したことになる」等々。

この様な批判を耳に入れているうちに、私自身も「なんとかせなあかんなあー」と思う様になってきた。ところがその時の私の頭の中は、どういう訳か「悪いことをした！」という意識が支配的であった。そして、話し合いの方も「白山調査への参加がどのように悪いのか――あるいは若干の正当性はそこに存在するのか――という内容の議論であった。

その話し合いの中で、私がとった行動は次のごとくである。私はまず、「委託研究の問題等考えることなく、無批判に白山調査に参加したことは問題である」と、簡単に自分自身を総括した。そしてそのあとで「何で悪いのか」「どのように悪いのか」という理論付けに狂奔した。その具体的な行動としては、生態の学生の中で"悪"をおかした人々への批判、とりわけ〈ものわかり〉の悪い人への批判を展開していった。本当は自分自身にはね返って来るはずなのだが、そのころの生態懇談会は、他人をやっつけるということの出来ない〈心優しい人〉が多かったので、私自身、自己嫌悪におちいることなく、生きてゆくことが出来た。

この議論を通して、県のやり方、大串教授や自然破壊とかには、別段怒りもなく心の動揺もなかったが、一つだけ「はっ！」としたことがある。それは一人の学生が、大串教授を批判して「白山調査にしても小笠原のアルバイトにしても、生態全員に声がかけられた訳ではない。一言の相談もうけていない学生も数人いる。大串教授は学生に対して選別的に対応している」と述べたことである。私はこれまで20数年生きてきたが、選ばれ声をかけられる立場にあった

ことはあっても、選別され声をかけられない立場に居たことはなかった（いたかもしれないが気がつかなかった）。そして今までそのようなことに疑問をさしはさむことはもちろん、《選別する》という現実にさえ気が付いたことはなかった。「はてな？　これはどういうこっちゃ」という疑問がわいてきた。「大串先生も忙しいから、全員くまなく声をかけることはしなかったのだろう」「大串先生の身近にいた人に声をかけたのだろう。僕たちだって仲の良い人達には教えてやって、仲の悪い人には教えてやらないということがあるじゃないか」と、まずは「自分は好きこのんで選別してもらったのではない」と考えたのであった。

しかし、この疑問が頭の中に巣くうと、日ごろの素直な判断がだんだん怪しくなってきた。「教授と仲良くするということは……」「教授にとって良い子であるということは……」

生態学のいっぱしの研究者にならんとして、はるばる金沢まできた私であった。その一つの近道として選んだ白山調査への参加が、この後思わぬ方向へと　発展　していく、知らなくても良かったことを、知ってしまうことになろうとは、神ならぬ私の知るよしもなかった。だが、私はまだ無傷であった。真面目な人間の階段を一　段　わった程度である。一歩上へ踏み出せば、それで良いのだから。

（つづく）

《書　評》

マフモード・マンダニ著

自主講座人口論グループ訳

反「人口抑制の論理」

風濤社刊・1976年・1500円

世界人口は2.1%の率で増加しつつあり、このままいくと、紀元2000年には人口は2倍となり、いずれは地球の収容力を越えて、食糧がなくなって、人類は全滅する。いまのうちに手を打たなくてはならない。とくに、3%もの率で急増しつつある、開発途上国の人口抑制が急務である。といった「人口論」が横行している。その末席をけがすものの一人として、まことにはずかしいが、その急先ぼうをつとめているのが、生態学者である。いっぺん、やっつけたらんなんと思っていたら、まことに打ってつけの本が見つかったので、紹介しておこう。

著者のマフモード・マンダニ氏は、ハーバード大学客員教授で、1974年にブカレストで開かれた「世界人口会議」の会場の外でおこなわれた"反会議"で講演された人だそうである。そのときの講演が、この本の第2部「人口抑制のイデオロギー ―― 人口抑制計画の提起する思想的問題」に載せられている。

第1部「反"人口抑制の論理"」は、アメリカのロックフェラー財団とインド政府が、1954年から69年まで、16年間にもわたっておこなった、インド・パンジャブ地方のある農村における「人口抑制の調査と実験」を、徹底的に分析・批判し、先進国が開発途上国におしつけている人口抑制計画の実体と意図を、実証的に明らかにしている。

「カンナ・スタディ」というのが、その調査と実験の名称である。インドの農民に、まず産児制限の意志があるかどうかをたずね、次に避妊具・薬を渡す。そしてその効果を調べるという実験である。インドの農民は、産制の意志ありと答え、避妊具を受けとった。しかし、出生率は全く下らなかった。実験は失敗したのである。現場責任者であったインド人の学者ソハン・シン博士は、「要するに農民たちは教育がないし、無知なんですな。彼らに必要なのは、何にも増して教育なんですよ」(p.29)といってのけた。正規の報告書はもっとひどい。「我々西洋の人間は、人間の尊厳、生活を非常に尊重する。しかし、パンジャブの農民たちは、必ずしもそうした感情を持ちあわせていないようである。人々が際限もなく増えていくことに対する恐怖は、ある人々にとっては常識であったとしても、パンジャブの農民たちは必ずしも

そうした見方をしていない」（p.29）

果してかれらは「無知」だったのか。農民たちの信頼を得たマンダニは、そのホンネをきき出す。「パープジー（親父さんの意）、いつかあなたもわかって下さるでしょう。時にはウソも方便、ということもありますよ。人を傷つけずにすむし、第一そう答えることが調査班の人々を助けることにさえなるかもしれないしね。」（p.22）彼らは、すべてを知っていて、使わなかったのである。はっきりいえば、調査員は「無知」な農民にだまされたのであった。これでは、どちらが無知なのかわからない。マンダニはこう結論する。この計画の失敗の原因は、研究にたずさわった人（アメリカ人、インド人を問わず）の持っている「あいつらは無知である」という「偏見」である、と。

それでは、なぜインドの農民は、避妊具を使わなかったのか。マンダニによれば、かれらはもっと沢山の子供をほしがっているのである。農民はいう。「あの連中は、子供を産まなくてすむ薬をタダでやるといっていたけど、そのくせ、子供を産めなくて困っている人たちを助ける薬は持っていない。そんな薬があったら私たちも使うんですがね」（p.182）

インドの農民がたくさん子供をほしがる理由を、マンダニは、インド農村社会の歴史、とくに欧米の植民地として組みこまれ、また戦後は新植民地主義のもとに支配されていった歴史の調査と分析から、見事にうきぼりにしていく。でもそれは、少なくとも40才以上の日本人なら説明の必要はあるまい。つい30年ほど前まで、日本でも、農家はみんな子沢山であった。子供は賃金のいらない労働者だったのである。人をやとえない貧乏な農民ほど、子供にたよるほかはなかった。高校進学率が100%に近づき、大学でさえ40%がいくようになった現在の日本では、子供とは金ばかりかかり、そのわりには見返りのない存在となっている。だからあまり子供をつくらないのである。

インドの農民は、我々の想像を絶するほど貧しい。その子供は、10才になる前に一人前の労働者となっている。たくさんの子供をつくり、家族みんなで必死に働らく。そして金を貯めて農地を買い、子供に分けるのである。子供が少ない農家では、他人をやとわねばならない。採算がとれず、土地を売っていく。やがては土地のない貧民となっていかざるをえない。かれらは、たくさんの子供を持たなければ、生活していけないのである。「子供を育てるのは大変かも知れませんよ。でも、みんな大きくなれば、幸せを生む宝ですよ」

インドにはきびしい階級制度（カースト）がある。マンダニの目は下層カーストの人々にも注がれている。ここでもやはり、農民と同じく、たくさんの子供を持たなくては食っていけない事情があった。マンダニを「カンナスタデイ」の調査員とまちがえたある下層カーストの一人は、次のように語った。「1960年だったかな、あなたは私にこれ以上子供を産まないように、と言いましたね。でも、見て下さいな。私は6人の息子と2人の女児を持って、裕々自適に暮しているんですよ。子供たちは大きくなり、私にお金を持ってきてくれるんです。1人

は村の外でも働いています。あなた方は私が貧乏人だから大勢の子供は養えないといいましたね。でもどうです。子供が多いおかげで今じゃ私は金持ちですよ」p.136～137)

アメリカを先頭に先進諸国は、要するに開発途上国が工業化し、生活水準を上げては困るのである。資源はなくなり、汚染は増える。人口があまり増えても同じである。先進国の人口ののびは止っている。いずれは途上国の大軍に包囲されてしまう。何が何でも、その人口増加をおさえねばならない。途上国の生活水準を上げ、子供に金がかかるようにすれば、人口は増えなくなるが、それは出来ない。そしてついには、強制断種手術までおこなうのである。ガンジー政権が倒れた原因の一つに、これがあったという。"無知"なインド農民は、早くからその意図を見ぬいていた。「アフリカ大陸の人口密度は1マイル平方でも、平均90人くらいの割りですよね。大変人が少ないわけです。そこには"人口の圧力"などあるはずがありません。しかし、それでもアフリカは貧しいといわれています。分るでしょう。私たちは人口が多いから貧乏だ、というわけではないのです。貧困の本当の理由は、もっと別のところにあるんですよ……」(村の学校教師)「あのアメリカ人たちは、この子と同じような微笑を浮べてやってきたけれど、あいつらはこの子たちの敵でさあ。あいつらの興味あることといったら、戦争をやることか、家族計画を押しつけることしかないんだから」(ある農民)

日本でも有名なアメリカの生態学者オダムの「人口論」の片リンを紹介しておこう。「その一つの原則は熱力学の法則として知られているもので、どのような系にも適用できる物理学の一法則、即ち"熱力学の第二法則"である。これはある一つのものから他のものにエネルギーが移される時には―― この場合は太陽→植物→動物→他種の動物―― 常に、かなり多量のエネルギーが熱として失われるという法則である。……その結果として、現在の多くの国におけるように、人口が多く混み合ってくると、人々は肉をたくさん食べられなくなることを意味していることである」(宝月他編「環境の科学」NHK市民大学叢書、118～119)

過密があると"熱力学第二法則"で、飢えがおこる。これはまったくのウソで、過密の日本は飽食し、過疎のアフリカが飢えていることを証明できない。オダムより、インドの貧しい教師の方が、ずっと"知的"であることになろう。

訳者の「自主講座人口論グループ」によるすぐれた解説がついている。小さな出版社なので、本屋の店頭にはないことが多いが、注文してとりよせるだけの労をとっても、読んで損はしない、いい本である。

(奥野良之助)

△○◎？ 編 集 者 へ の 手 紙 ？◎○△

国際的一流雑誌には必らず、"編集者への手紙"というらんがある。これのないのは、したがって、国際的一流雑誌とはいえないわけである。何でも"一流"の好きな当編集局も、断固としてそのらんを設けることにした。今後学会本部あて手紙を出される方は、いつ何時このらんに無断転載されるかもわからないので、その旨覚悟されたい。手紙が来なくなれば、口頭で言ったことも手紙と見なすこととする。国際的一流誌としての体面を保つための、やむを得ざる処置として了解願いたい。 ――――（編集無責任者）

◎ 所で、高度な御論説ばかりで私などとは次元の違う方々ばかりですが、面白く拝見しました。特に「自然保護論」は面白かった。奥野氏をコキ下しているのも面白いですが、私の言いたいことを奥野氏が言って下さったようで、うれしくなりました。先日何でしたかSF小説を読みましたが、全世界が中国（日本を併合）とロシアとになって、それにアメリカとで、アメリカ人がイギリスに漂着したら、イギリスがライオンに占領されていて、エリザベスの子孫が逃げまわっているというような話でした。
もしも自然を保護してサルや、クマや、コウノトリ、ツル、ワシが横行したら、人類はどうするのでしょうか。コワイです。それにつけてもこのごろの「サファリブーム」はコワイです。私は祖母から、ツル追いのコワかった話、作物がシカに荒らされた話を聞いています。兵庫県がコウノトリにかけている費用は大変なものです。あれだけを教材費にまわしたら……まだ教員のクセが直らないようです。氷の山のワシを護るのも結構ですが、自分がタバコを吸い、自動車の排薬ガスをマキチラシ、原パクをハレツさせていては何にもならないで、ワシどころかこのワシ（我）が却って参ってしまうのではないのでしょうか。あまり言うと差し支えがありますが……私も氷の山を護る会員です。……※※氏への義理立てと、原則的には賛成だから……（ワシを殺せとは言えません）

"もうすぐ春ですねえ、恋をしてみませんか"を生理的に解説せよ という試験問題が計らずも（昨年はじめから予定）キャンデイーズ解散記念（ミキとスーのフアンです）になりましたが 小生もまた 29年つづけた ※※の講義を止めざるを えなくなりました。こんな問題出せる講義だから むしろ タノシミとシャレで やってたので 多少さびしく、やや しんどくなりはじめた 診察に おわれています。もっとも 本業の講義も タイクツした学生に タイクツした先生が しゃべっても無効だ などと放言し 気ままなことを しゃべることにきめました。

学会および非学会記事

※　原稿がどういうわけか、ぞくぞくと集まり、たちまち第3号ができました。2号を見て、そのあまりのいい加減さに、これではいかん、と思ったのか、これならオレでも書ける、と思ったのか、それはどちらでもいいのですが、とにかく結構なことです。この調子で、どんどん原稿をお寄せ下さい。

※　もっとも、原稿がたくさん来たしわよせを受けて、「野良」氏の「大学学」と「哲学雑話」は、休載のやむなきにいたりました。野良氏は大変不満で、会長との間が剣悪な状態になりかけたのですが、そこは以心伝心の仲の2人、大事には至らなかったようです。実のところは、野良氏の原稿はまだできていなかったようで、内心はほっとしているのだという説もあります。

※　「綿ふき病」の足立興一氏は、京都府立医大の眼科の先生で、会長より十数年齢上で、その分だけ余計にいたんでいるという方です。その言われること、どこまでが本当でどこからが冗談なのか、判然としないという点で、会長とよく似ています。そのくせ、本心は大変真面目でありまして、この点も会長と同じだという説と、いやその点だけがちがう、という説があります。

※　"自然原人"氏は、いまのところ、無気味な沈黙を守っています。何分名うての論客、今度はいかなる方面に、何をひっさげて出現するか、アラシの前の静けさ、といったところです。切りつける相手は、会長だけにかぎってはいないようで、皆さん御用心の程。

※　[illegible]なる新人が登場して、何やら怪しげなことを書きはじめました。至極おとなし気な様子であらわれておりますが、これがなかなかのしたたか者で、何食わぬ顔をしつつ、人を一杯食わすという、高等技術の持ち主なのです。一見不真面目でその実大変真面目であるという、足立先生や会長と、丸っきり正反対だという、もっぱらのうわさ。皆さん、だまされぬように気をお付け下さい。

※　もうお気づきと思いますが、当学会誌は第1号以来、通しページになっております。この号で早くも3ケタの大台にのりました。今度は4ケタをねらいます。別にそれほどの理由はないのですが、もし万一、引用されることでもあったら、"日本生物学会誌、第38号、1245～1246ページ"など、ちょっとカッコいいではありませんか。その実は、1枚2ページのペラペラであっても。

日本生物学会誌　第3号　1978年6月10日

編集・発行　日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者　奥野良之助